

リコちゃんごめんね

高岡 啓次郎

アユミは小学校にかよう元気な女の子ですが、ひとつ悩みがありました。それは自分の性格のことで、なかなか人にあやまることができないのです。

親にもあやまらないのでいつまでもしかられます。しかたなく最後にはあいまいにコクンと頭を下げてしまうけれど、ちゃんと口にだして言えませぬ。イヤな気分が胸いっぱいにのこります。

二歳ちがいの妹はすぐにあやまつて、あととはけるつとしています。それにくらべてアユミは「あんたは可愛くない性格だ」といわれてしまいました。

学校でもこんなことがありました。アユミがひとり歩いてみると、ウサギ小屋にガラスがとまっていたので石をなげたらウサギにあたり死んでしまったのです。いったい誰が石をぶつけて殺したのか、と大

さわぎになりましたがアユミは自分がやったと言えませぬ。他にもあるのです。おそうじのとき、金魚バチをアユミともうひとりが持っていました。バランスをうしなつて落としてしまいました。

床はガラスと水と金魚だらけで先生にひどく怒られました。お互いに自分は悪くないといつて大ゲンカになってしまいました。アユミの心にはいつまでも苦い薬みたいな思いが残りました。そのせいもあるのか、本当に仲良しとよべる友だちがなかなかできませんでした。

でもまもなくアユミが変わるチャンスがきました。クラスにリコちゃんという名の転校生がやってきたのです。

その子は片足がほそく歩き方が変でした。教室のみんなは声を殺して笑っていました。ところが、くすぶつていた煙の中からまもなく火がつかしました。男の子がバツタみたいだと言ったときは教室中が大笑いになり、アユミもみんなにつられて一緒に声を出してしまつたのです。

席についたリコちゃんは小さくなつて肩を丸め、たれさがつた髪の毛の間に蒼じろい顔を隠しています。それはじつと涙をこらえているように見えました。アユミはみんなと一緒に笑つてしまつた自分がとてもきらいでした。

学校の帰り道、アユミはリコちゃんの後ろを歩きます

た。近づいてあやまりたかつたのです。ですが胸がドキドキし、のどの奥に玉ができたように声がでませんでした。

ある晩のことですが、お母さんが近所の人から聞いたことをアユミに言いました。

「ノリコちゃんは生まれつき片足の関節が曲がついて前の学校でもいじめられたそうよ。体育の授業も見学が多く、運動会にも出られないんですつて」

アユミは、ノリコちゃんに悪いことをしたという気持ちがあります。強くなりました。あやまれない自分がつくづくいやでした。そんなある日、クラスのみんなで遠足をおねた写生に行きました。一面がタンポポだらけで、アカシヤの花も咲きはじめています。

昼休みに金持ちの子がお父さんが買つてくれたというブローチを自慢してから、まわりの友だちに言いました。

「あそこの大きな杉の木までかけっこしてここに戻つたらつしやい。これと同じブローチがもう一つあるから一等の子にあげる。わたしが審判よ。走る人はこの指とまれ」

五人ほどが、われさきにと指にとまりました。

金持ちの子はアユミに向つて一緒に走らないのかときき、それからノリコちゃんを見て、アンタは無理よねといじわるそうに言いました。

アユミは、わたしは今、すこしおなか痛いからといつ

て加わりませんでした。

みんながいつせいに走り出したとき、ノリコちゃんは黙つてタンポポの花を見つめていました。

アユミはそばにきました。

ノリコちゃんは花をつみはじめました。

アユミもタンポポをつみました。

やがてノリコちゃんは首飾りをつくりはじめました。

きように指を動かし、アユミにはとてもマネができないはやさでした。

あやまるのは今だと思ひました。ですが再び胸がドキドキしはじめ、のどの奥に前と同じようなかたまりができたような気がしました。

花輪ができたときノリコちゃんはアユミにむかつて「これあげるよ」と言いました。

ノリコちゃんの瞳が輝いています。そのときアユミは泣きそうになりました。アリガトと言つたあと、言葉が詰まつてノリコちゃんと言えず、

「リコちゃん、こないだはごめんね」とあやまつたのです。ノリコちゃんはキョトンとしていましたが、すぐに何のことか気づいたらしく、「いいの、慣れてるから」といつて笑いました。

やがて二人はいちばんの仲良しになつたのです。何でも

助け合い、励まし合うようになりました。アユミが盲腸で入院したとき、いつもノートをとってきてくれたのもリコちゃんでした。二人はいろんな夢を話し合いました。リコちゃんは大人になったら学校の先生になりたいの、だと言いました。

アユミちゃんは何になりたいのときかれたとき、普通のお嫁さんになることしか考えてなかったのてつい、わたしは婦人警官かなと答えてしまったのです。このあと二人は同じ中学にかようようになりました。

時は流れました――。

「それから二人はどうなったの？」

頭にコブをつくってきた男の子がアユミにききました。

「いまリコちゃん来るからわかるよ」

とアユミは答えました。やがてタクシーがとまり、ドアが開まる音がしたかと思うと、開いた窓から声がきこえてきました。

「アユミちゃんいるかしら？ リコがきましたよ」

今日はアユミの誕生日ですから一緒にケーキを食べようと来てくれたのです。テーブルについたときノリコちゃんがいいました。

「アユミちゃん、七十歳の誕生日おめでとう。お互いに歳

をとりましたね。これはわたしの教え子がやっているケーキ屋さんのだから美味しいのよ」

アユミは普通のお嫁さんになって歳をとりました。今までのいろんなことがありました。ノリコちゃんは戦争でお父さんを亡くしました。アユミは炭鉱でだんなさんを失い、ふるさとに帰ってきました。それでも二人は何かにつけ支え合って生きてきました。

その日ふたりは久しぶりに楽しい時間をもちました。昔の話も出て、アユミがカラスを追い払おうとしてウサギを死なせたのに、自分がやったと言えなかったことを今でも気にしているという話もできました。

ノリコちゃんが帰ったあと、アユミはケンカをして帰ってきた孫の前には言いました。

「アンタは小さいときのわたしにそっくりだよ。でも、わたしが一生つきあえるお友だちをもてたのも勇気をもって言ったからなんだよ」

男の子はクリクリした目でアユミを見つめ、

「おばあちゃん、なんて言ったの？」とたずねました。アユミは幼い孫の頭をなぜながら答えました。

「リコちゃんごめんねって、ひとこと言ったんだよ」

男の子はひざがしらを右手でポリポリかきながら、丸ぼうずの頭におかれたアユミの手に小さな指をからませて照れくさそうに笑いました。